序　　文

大和郡山市の一部は、旧平城京の西南部にあたり、平城京のなかでも特に重要な羅城門や西市などの遺跡が存在している。

今回、焼却場新営に伴ってその予定地を発掘調査することになったが、当該地は平城京坪付けの上では右京八条一坊十一坪と平城宮南面西門（若犬養門）に通ずる西一坊々間路にまたがっており、調査は西市東部の坪の利用状況と西一坊々間路の確認を目的におこない予想以上の成果をあげることができた。

まず第一に、西一坊々間路は、これまで文献・平安京古図・遺存地割の上から大路と同規模と考えられてきたが、今回の調査でそれを初めて実証したことである。

第二に西一坊々間路西側溝が単に排水施設としてだけではなく、平城宮に物資を搬入する運河として機能していたことが明らかになったことである。

平城宮に南面する他の二門（朱雀門・壬生門）が専ら儀式や祭祀に使用されたのに対し、若大養門と西一坊々間路は、物資の運搬や官人達の通勤等の実用的な目的で使用されていたことが、従前の調査研究成果と宮から遠く離れた八条の地における今次の発掘調査によって明らかになったわけである。このように、平城宮と平城京は一体のものであり、両者の調査研究があいまって都城研究が進展するのである。

大和郡山市では、京阪神のベットタウン化が進行し、西市の保存問題で顕現化したように、開発行為に伴う平城京の破壊が深刻な問題となっている。

言うまでもなく、大和郡山市は中近世の城下町と古代の都城跡という類い稀な歴史的環境に恵まれた土地であり、今後、それらの遺跡保存と活用を一層強化して、伝統的な歴史環境を生かした都市作りを望みたいものである。

最後になりましたが、こうした成果が得られたのも衛生局をはじめとする市当局の全面的な御協力の賜であることをここに銘記し謝辞としたい。

昭和59年３月

奈良国立文化財研究所所長
坪　井　清　足